

秩父絹の生産と流通に関する一考察

平野 哲也

I はじめに

江戸時代の秩父地方を代表する産物は絹織物であり、それが山村農業地帯の百姓に莫大な現金収入をもたらしていた。その生産と流通については、これまで明らかにされた限り、概略以下のようにまとめられるであろう¹⁾。

宝永6年(1709)の「秩父領百姓年中業覚」²⁾には、2月初午の蚕祈祷に始まり、4月の蚕の掃立、5~6月の養蚕の繁忙期、6月中旬の生糸とり、7月の新絹織立に至る一年間の養蚕・製糸・絹織の生産のサイクルが描かれている。そこに示される通り、個々の農家が副業的に、養蚕―製糸―絹織まで一貫した家内手工業によって生絹・白絹を生産するのが江戸時代の秩父絹の特徴であった。こうした一貫生産の形態は、安政6年(1859)の横浜開港まで根強く残り、開港以後、輸出用生糸の価格騰貴に刺激され、秩父郡でもようやく生絹生産からの製糸業の分離・独立がなされた。

そして、秩父郡内の絹取引の中核となったのが、秩父大宮の絹市である。大宮町には1・6日を市日とする六斎市が開催され、少なくとも宝永6年までには、それぞれの市日・市庭で早朝(一般商品の取引前)に、時間を限定して絹市が開かれるようになっていた。そこに、村々から自家製の生絹・白絹をもった生産者がやってきて、買人と相対による値段交渉を行ない、絹の販売を行なった。また、妙見社の霜月大祭に付属して立てられた絹市(11月3・4日)は絹大市と呼ばれ、諸国からの商人の参入を数多く招いていた。絹市では、越後屋・白木屋・大丸屋などの江戸呉服問屋から前渡金を与えられ、その注文に応じて絹を買い付ける絹買商人(絹買仲間)が、集荷の中心となった。絹買仲間の収入は、集荷した絹の量に対応する口銭

であった。江戸時代中後期、大宮町にはそうした絹買仲間が10~12名存在した。

本稿では、以上のような秩父絹の生産と流通のあり方をふまえて、これまで見落とされがちであった個々の百姓の活動に目を向けることで秩父絹の多様な生産のあり方について事例報告を行いたい。現実には、秩父郡内には、生産工程の分化の様相を物語る史料も数多く存在する。それは、桑・繭・糸の商品化の問題と関連し、百姓の「農間」稼ぎとも関わる問題となる。また、幕末期の大宮町の絹買商人の経営を通して江戸問屋資本との関係や当時の絹・糸流通の実態について若干の事実を提示する。

II 絹生産の工程の分化と農間余業の拡大

1) 桑・繭・糸の商品化

享保期(1716~1735)、京都に基盤をおく呉服問屋が江戸に進出し、そこに置いた出店を通じて産地から直接絹を仕入れる集荷形態が主流となった³⁾。大宮町においても、絹買商人を通して江戸呉服問屋の資金が大量に流れこみ、絹市での取引量の急増を引き起こした。絹の価値は高まり、秩父郡内の百姓の絹生産も活況を呈した。

18世紀後半は、絹生産と絹市取引の隆盛期であり、絹大市だけとってみても、安永期(1772~1780)には7000疋前後の膨大な取引量が維持された。3・4両日に限定されていた大市の開催日は、宝暦期(1751~1763)の末年より3・4・6日と1日の増加をみ、明和期(1764~1771)に入ると、さらに5日も市日に加えられた。絹1疋の平均値段は、寛延3年(1750)に金2分だったものが、安永8年(1779)には金3分弱にまで跳ね上がった。

こうした社会状況は、絹生産に不可欠な桑その

ものの商品価値を急上昇させた。明和期になると、秩父郡内の村々で、桑畑が拡大し、一般の畑を侵食していく状況を見ることが出来る⁴⁾。

18世紀後半以降の秩父郡内の百姓の日記には、米・麦・大豆など主穀物価の動向とともに、桑値段の推移について克明な記録が残されるようになる。たとえば上田野村(現秩父郡荒川村)の井上家は、その日記『見聞集日記』のなかで、天明8年(1788)5月の「浦山桑」の日々の相場を記し、上州高崎の桑相場についても書き留めている⁵⁾。秩父領の百姓が、他地域の桑相場にまで目を配り、当地域の桑相場を相対化しようとする視座を持ち始めていたのである。日々変動する桑相場が存在し、その価格変動に百姓が強い関心を寄せているということは、百姓の桑需要の高まりを如実に示す。「浦山桑」という呼称にしても、浦山村(現秩父市浦山)が周囲の桑需要に支えられて、桑生産地として特化の兆しをみせていたことを予想させる。

現実には、秩父郡の百姓のなかには、自分で桑生産を行わず、相場を見極めてそれを購入しようとする者が増加していた。天明8年6月、金沢村(現秩父郡皆野町)では、百姓喜八が同村の五右衛門から桑3束を金1分の値組みで買い取る契約を結んだところ、「桑元も多所持仕候百姓」の平右衛門が桑値段を1分2朱につりあげるよう五右衛門に指示し、そのことから紛争が生じている⁶⁾。ここに、桑を買って養蚕を営む喜八と、桑販売を収入源とし、価格つりあげをもくろむ平右衛門という2つのタイプの百姓の姿が見出せる。同じ村の百姓の間にも、桑についての需給関係・売買関係が生じていたのである。

桑の取引は、桑市という売買の場でも行なわれた。少なくとも安永期には、大宮郷における5月の桑市の存在が確認できる⁷⁾。市の開設は、桑を買い求めようとする者の増大と、その欲求に応じて取引量を拡大させる場が必要となったことを示唆しよう。文化期(1804～1817)になると、「往古々妙見宮於社地桑市立来候処、去年中桑高直二付毛桑并外悪桑等持出し売買致し」という事態が発

生している⁸⁾。桑相場の高騰が悪質の桑売買の横行をよんだのである。同じ文化年代、新・古大滝村の百姓たちは「近年他村亦者遠方々桑買二被越、其節不相当之直段二而買請彼は仕候義茂有之」ことを憂え、自村で生産した桑を他村者へ販売することを禁止し、自村の養蚕農家にのみ供する内容の村議定を作成している⁹⁾。桑の商品化が進み、村々の桑を安い値段で買い叩く商人が闊歩していた様子がうかがえる。

繭についても桑と同様に、それを商品として購入する動きがみられた。上田野村井上家の『見聞集日記』には、上州・甲州・奥州など有力な養蚕地帯の桑・繭値段が記録されており、全国的産地の繭価の情報収集に貪欲となってきた百姓の姿が見出せる¹⁰⁾。こうした物価情報は、実際に秩父郡内の百姓の行動に大きな影響を及ぼした。文政4年(1821)10月、新大滝村の百姓2人が「甲州江罷越繭買請字雁坂峠越し」栃本から猪鼻へと中継輸送したことについて、古大滝村の名主が、従来の輸送経路の規範を破る不法行為だとして代官に訴え出ている¹¹⁾。訴えられた新大滝村の百姓たちは、「年来繭商ひ致、年々甲州桑戸村江罷越繭買請引取、村内并二大ミヤ郷其ノ外二商売」していた。新・古大滝村は、雁坂峠を挟んで甲州・信州と秩父郡との流通上の結節点に位置する村である。その百姓たちが、大宮郷の需要を見込んで、甲州まで出向いて繭の集荷を行ない、それを大宮郷に売却する商業活動を展開させていたのである。大宮郷の繭需要は高く、大宮郷では、桑を買って養蚕を行なう者、繭を買って糸引きを行なう者といった分業関係が広範に成立していたとみなければなるまい。

では、糸についてはどうだったのであろうか。すでに元文5年(1740)の段階で、小鹿野町の柴崎家が、「前橋糸」とともに、28両380文の「大宮糸」を買い付けていた事実が報告されている¹²⁾。大宮郷には、周辺地域の商人の需要に応じて、糸を商品として売り出す者が存在したのである。秩父絹の隆盛期とされる明和7年(1770)には、秩父郡の百姓が他国産の生糸を買い入れて、絹織を始め

たことが問題となっている¹³⁾。「去ル辰年(宝暦10年)他国細糸当所(秩父領)江買込麻絹之縦ニいたし織出シ」た絹が、従来の製品より品質が劣るとして「京都・大坂・江戸売先店々問屋」から強い不満がもたらされたのである。こうした江戸問屋の不興に「秩父麻絹捨り(廃り)」を予想し危機感を募らせた絹買仲間13人は、「相談」を行ない、「秩父地糸」の使用の奨励と「他国糸売候者宿不仕」ことを申し合わせた。この背景として、一つには絹・麻絹需要の増大があったが、桑・繭値段に敏感になっている当該期の百姓の動向を考慮に入れれば、秩父郡の百姓が、糸値段の地域的な格差をみてとって、より安価な原料の購入に走った結果であったと判断することも可能である。しかも、問題がここまで肥大化しているということは、他国産糸の利用の動きが秩父郡内に蔓延していたことを示唆する。こうした糸の購入が、個々の百姓単位に個別的になされたとは思われない。そこには、大量の糸をまとめて購入し、それを生産農家に売り捌く仲介者の存在を想定する必要がある。その仲介者とは、少なくとも絹買商人ではなかった。「他国糸」の使用によって真っ先に打撃を受けるのが、江戸の呉服問屋と結びついた絹買商人であり、彼らは誰よりも秩父絹の規格維持を願ったからである。そうなる、まず考えられるのは、経済的に有力な在村の地主クラスの者たちである。そして、一般の百姓のなかからも糸の集荷と販売を「農間」稼ぎとして手がける者が生まれていた。天明元年(1781)8月の大宮郷の百姓の願書によれば、「当郷市之儀一六二相立絹横麻并糸類売買仕来候」¹⁴⁾とある。天明期(1781～1788)までに大宮の市で糸の売買が始まっており、新しい商品流通の仲介者の活躍する場が与えられたのである。

2) 絹生産に関連する農間余業

18世紀後半から19世紀初頭にかけての桑・繭・糸の商品化の動きは、それら商品を集荷・販売する流通上の仲介者の登場を必然化した。そうした者の存在も含め、絹織物産業を擁した秩父郡の趨

勢は、文政10年(1827)8月の大宮郷の「農間余業」の実態によく反映されている(第1表)。

大宮郷の久保四郎右衛門組には、絹・呉服・反物類に係る「農間」商人10名と「絹もの細工」商人1名が登場している。白木屋の絹買であった井上藤右衛門と大丸屋の絹買であった井上治右衛門も含まれているが、その他の者については、具体的な営業内容や経営規模を知ることはできない。ただし、なかには、江戸の絹需要と直接結びついた者もあったと考えられる。「農間」商人は、絹以外に、煙草(江戸時代中後期の秩父郡の重要な生産物)など複数の商品を組み合わせて営業する場合が多かった。また、桑苗を商品とする者もいた。さらに、紺屋と「絹せり」も絹の生産・流通に深く関わる仕事であった。他方、松本宗左衛門組では、「絹売買」が2名存在し、繭を取り扱う商人は6名を数えた。そのうち3名は繭とともに絹を扱い、別の1名は糸も商品の一つに加えていた。紺屋も2名存在した。これら「農間」商人の何人かは、店借や抱百姓となって営業を始めた者たちであったが、彼らは決して経済的弱者であったわけではない。むしろ資金力を有し、新たに商売を始めようとする意欲に満ちあふれた者たちがその主流をなしたとみるべきである¹⁵⁾。たとえば、久保四郎右衛門の抱百姓となった近江屋新三郎は、久保家から店借りし、酒造・質屋・呉服物・太物・穀物を扱う多角的な商業経営を行っている。

秩父絹の生産工程の分化がさまざまな商品を生み、それらの流通の活発化が労働機会を拡大させ、化政期(1804～1829)前後の大宮町に大きな賑わいをもたらしたのである。そうした、「農間」商売への欲求は、大宮町だけにとどまらず、周辺村々にまで波及していった¹⁶⁾。また、直接的には絹と関係しなくとも、これほど広範な「農間」商売の展開を支えた社会的条件として、大宮町をめぐる絹生産・流通の影響を考えないわけにはいかない。げんに、大宮郷の髪結職人仲間は、絹市の繁盛が江戸をはじめとする各地の商人の到来を招き、そのことが自分たちの髪結渡世を潤している

第1表 文政10年(1827)大宮郷久保組・松本組における「農間」商人

農間商人・職人	久保組			松本組
	百姓	店借	抱	
農業・統	人43	人	人1	人44
居酒	1			
居酒・草履・草鞋	1	1		
居酒・蕎麦・饅頭・餅			1	
居酒・豆腐・その他				1
蕎麦・饅頭・果物	1			
豆腐・蕎麦・饅頭	1			
豆腐	1			
果物	1	1		
穀物類渡世				1
穀物・小間物類商				1
穀物・居酒屋渡世				1
穀物・荒物類商い				1
古着・豆腐・果物		1		
干菜物その他小商い	1			
切煙草・草履・草鞋	1			
種物・野菜物類商い				1
葉種商				1
足袋・小間物商い				1
足袋・もも引類小商い				1
旅籠屋・酒造・居酒屋				1
豆腐・綿打・割煙草商い				1
荒物類商い				1
仕立屋渡世				1
神仏・表具・その他小細工物商い				1
古着・蓑板商い				1
古着・切類・その他小商い				1
骨屋渡世				1
古鉄商い				1
精売買	1			1
櫓・小細工物売買				1
櫓・魚類商い				1
小細工物渡世				1
ひな物万小商い				1
質屋	1			
質屋・穀物		1		
章提灯張替	1			
人工職・渡世	2			1
材木方日屋稼	1			
材木商売	1			
材木・油・蠟燭	1			
■・木挽	1			
木挽渡世				1
左官渡世	1			2
医業渡世	1			2
売薬				1
馬医・馬喰			1	
馬喰				1
黒鉄渡世	1			
髪結	1			
桶屋渡世	4			
指物屋渡世				2
指物・紺屋渡世				1
紺屋職・渡世	1	1		
桑苗・干菜物	1			
絹せり・旅籠屋・穀売	1			
絹せり	3			
呉服物・太物・穀物・質屋・酒造		1*		
呉服・太物・その他商い				1
絹商売・絹売買	4			2
絹・煙草・櫓	1			
絹・煙草・櫓	1			
絹・小間物類			1	
絹・煙草・荷物継立問屋・穀物	1			
絹もの細工	1			
反物・太物・穀物・その他	1			
繭・麻・煙草・その他商い				1
繭・麻・絹商い				3
繭・麻・油商い				1
繭・麻・糸類商い				1
	83	7	3	88

(文政10年「御改革二付人別并家数農商職人等調帳」(久保家文書)、文政10年「農商職人等調帳」(戸塚家文書)により作成)
注) ※は、久保家店借・抱百姓の近江屋新三郎

と述べている¹⁷⁾。

大宮郷では、宝暦期に2名の百姓が新規の「紺屋」渡世を希望している¹⁸⁾。こうした紺屋は主に木綿・麻などの染色を行なった者だったが、秩父絹の染色にも携わったと考えられる。明和8年(1771)11月には、紺屋が忍藩に対して運上上納願いを提出している¹⁹⁾。願書の主体となったのは、大宮郷6人・白久村1人・上田野村2人・大野原村1人の紺屋「仲間」であった。「年来紺屋職」を続けてきた彼らは、「追々繁昌」してきたために運上を納めたいと申し出た。ただし、運上を上納することの裏側には、藩による保護、ないし権利の保障を求める彼らの意志を知るべきである。それだけ、彼らの周囲に、紺屋職を開始したいと望む者の欲求が高まっていたのである。

こうした動向は化政期にも引き継がれ、それが第1表のような「農間」紺屋の出現につながった。その後、幕末期にかけて、大宮郷には、抱百姓となって営業権を獲得し、「染屋」「張屋」を兼ね備え、周辺村々から数十疋ほどの白絹を預かり「花色染」などの染色を行なう者が生まれてくる²⁰⁾。たしかに、江戸呉服問屋と結んだ絹買商人の集荷する絹は大量であり、飛脚問屋を介して京都(のちには江戸でも独立した染色屋が登場する)に送らなければ到底処理しきれないものであった²¹⁾。しかし、その一方で、大宮町に、染色を生業とする者が多数輩出してきているという事実も見逃すことはできないのである。

絹という産業を有することによって、流通面でも、百姓の経済活動の域が大きく広がった。秩父郡内には、大宮町の絹買商人と江戸の呉服問屋との取引関係以外に、小規模ながら独自の販売網を切り拓いた百姓の絹取引の流れがあった。

享保期、上田野村には、紙・煙草を江戸売りしたところ「売口沢山出来」たため、借金によって経営資金を確保し、漆・絹の販売にまで手をのばす百姓が存在した²²⁾。江戸の購買力の大きさを肌で感じとった秩父郡内の百姓は、江戸に照準を定めた積極的な経済活動を展開しようとしていたのである。元文期(1736～1740)から宝暦期にかけ

ても、大宮郷や別所村の百姓が江戸の「浜松町」・「杵町」に店借し、「絹商売」を始める動きがみられる²³⁾。これらの絹商人の商売は、秩父と江戸とを往復し、江戸まで絹荷物を運び、店売りする形態であった。彼らは、独自の「江戸絹売場徳(得)意先」を開拓・保持し、得意先の権利をめぐっては他の百姓と紛争を引き起こした²⁴⁾。江戸の特定の商人との取引関係は商圈ともいうべきもので、その取引関係自体が売買の対象となった。かつて大宮郷の藤兵衛がもっていた「絹買送り江戸店々」との取引の権利を45両を支払って「引受」た善右衛門は、弘化4年(1847)4月にそれら店々との取引関係をそっくりそのまま次男に譲り渡そうとしている²⁵⁾。

また、安永期以降には、江戸への絹荷物輸送の仕事を請け負う百姓も現われてくる²⁶⁾。こうした百姓の輸送力はさほど大きなものではなかったろうが、この背後には、小量の絹であっても江戸に持ち込み販売しようとする在地の要求が強く存在し、小規模な輸送力が期待されていたという社会情勢があった。秩父領の百姓のなかから江戸で絹商売を行なう者が生まれると、絹輸送業務の必要性が高まり、そこに利益獲得の道を見出す百姓が出てきたのである。

3)「機元」の登場と絹羅商人の台頭

秩父郡内において、商品化した桑・繭・糸を集荷する経済的有力者の存在を想定したが、そう考えたとき、化政期以降に姿を現す「機元」の存在に注意しなければならない。

化政期の秩父絹生産の状況を示す史料のなかには「織元」という表現をみることができる²⁷⁾。また、次の天保5年(1834)6月の史料²⁸⁾にも「機元」が登場してくる。

絹丈尺之儀短尺之品多有之売捌方難儀ニ付、当新絹
分短尺之分ハ不買取候間、五丈六尺ニ織出し候様機
元江申伝へ、尤尺長ニ相成候ハ、直段も夫丈相増可
買取旨江戸呉服問屋中申来候付、右之趣当組内江
相達呉候様当所絹買共申出候間、此段可被相心得

候、已上

ここでは、丈の短い絹の増加について江戸呉服問屋から非難を受け困惑した「絹買共」が、「機元」に対して統一規格を厳守した絹生産を求めている。化政期から天保期(1830～1843)にかけて、専門の機業家たる「機元」が生まれていたことは明らかである。この通知は「町方」へ2通、宮地・桜木に3通出されることになっていた。それは、「機元」の拠点が村方にあったことを示唆している。おそらく、こうした「機元」が、村々の生産農家の女性労働力を織子として編成し、集荷した原料(糸・繭など)を前貸金とともに配付し、絹を織らせていたのであろう。

これら「織元」・「機元」の集めた絹が売りに出される場が、主に大宮の絹市であった。ただし、天保期には、絹市の取引に混乱が起きていた²⁹⁾。

当町三町二而重立候もの武三人宛惣円寺へ寄合申談
候は、近年町方衰微いたし追々明家等出来候付、町
方繁昌相成候様、絹羅商人在方江不相廻、町内江絹
宿売株願、右宿江罷出口銭取二而坪方之もの持出し
売候様ニいたし、代買は絹代現金買二其市切二払候
様相成候ハ、是迄と違市人沢山出町内も自然繁昌
して坪売宿買代買共幾々ハ是又為合ニよろしき道
理ニ付(後略)

天保6年(1835)4月に大宮町の「重立」は「町方繁昌」について相談を行なった。そして、「絹羅商人」を在方へ廻らせず、彼らに売る権利＝株を保持させたいと、「坪方」(「機元」を含む生産者一般ないし在方の意味)の絹を「絹宿」において売ることを義務づけようとした。このことから、絹買商人をはじめ大宮町の住人の理想とする絹の取引形態が、在方から絹を市に持ち出し、それを「絹宿」を介して、「絹羅商人」に委託して売買するという形であったことがわかる。しかし、現実には、生産の現場から絹市に投下される絹の量は大きく減退していた。その原因であり、「絹宿」や絹買仲間の頭を悩ませていたのが、在方を廻り

歩く「絹羅商人」の活動であった。

もともと、絹買仲間と絹羅商人は、「絹代買之者并絹羅仲間惣代之者」³⁰⁾と並称されるように、一体となって絹市の取引に関与していた。宝永6年(1709)3月の市定³¹⁾によれば、「絹買」が「当地せり共」を介して絹集荷にあたる場合があり、その際油単1つにつき銭5文を渡す決まりになっていた。絹市においては、絹買仲間に雇われその意を受けた絹羅商人が、絹売宿を通して、実際の絹売買を担当していたのである。したがって、両者は、かつてはともに絹市の取引を維持する立場にあったといえる。しかし、天保期に至ると、そうした関係は崩れ、絹羅商人が絹市を介さず直接村々を廻って絹集荷を行なうようになる。絹羅商人は、各村において「機元」と個別的な取引関係を結んでいったと考えられる。そして絹羅商人は、集荷した絹を市には出さず(出したとしても正規のルートである売宿を介さず、買い手に直接売り渡す形態)、江戸へ売ったり、絹商人に自己の商品として売り捌いたりした。それは、在来の絹羅商人による新たな経済活動であったかもしれない。また、化政期～天保期に輩出してきた「農間」商人に象徴されるような、株をもたない新興の絹羅商人の絹市無視の行動であったかもしれない。嘉永6年(1853)の段階で、山田村に2名の「絹羅并蘭麻糸商」³²⁾が存在するが、彼らはそうした新しいタイプの絹羅商人だったと思われる。これは絹市を中心に据えた旧来の絹流通の仕組みを脅かす動きであり、それゆえ、絹買仲間や大宮町の住人は絹市取引の建て直しに必死になった。同じ天保期、上州富岡でも同様の傾向がみてとれる³³⁾。富岡は、地元の絹商人と都市問屋資本による前貸形態の取引関係が典型的にみられた町であったが、天保期には、「在方絹世利人」の「自分売」の横行が「絹売宿」仲間の商業独占をつき崩していた。それは、都市大問屋からの前貸資金の支配外の流通を意味し、「絹世利」の自己資金による絹仲買活動の成立であった。しかも、「絹世利」は、絹価格の決定権をも手中におさめる勢いをもっていた。こうした状況のなかで、江戸問

屋からの前貸金に依存していた絹買商人たちも、独自の経営展開を余儀なくされていくのである。

Ⅲ 幕末期における絹・糸の流通と生産

1) 大宮町絹商人の経営―大森家を事例に―

ここで分析対象とする大森家は、享保16年(1731)の段階で、すでに江戸問屋の「代買」を請け負う絹買商人となっていた。当時、喜右衛門を名乗り、以後、大森家の当主は喜右衛門の名前を世襲していく。大森家の菩提寺である野坂寺の過去帳によれば、大森家は少なくとも寛文年間には中町に屋敷を構え、初代忠兵衛なる人物が元禄13年に没していることがわかる。

江戸時代中後期における大森家の絹買付の様子を、毎年11月の妙見社の絹大市の取引量からみると、史料で確認できる限り、享保16年(1731)に497疋、宝暦11年(1761)に300疋(代金150両余)、安永7年(1778)に281疋(代金177両3分2朱・銭86貫900文)、安永8年(1779)に358疋(代金284両1分)という状況であった³⁴⁾。ただし、江戸時代中後期の大森家の経営内容は、これ以上明らかにし得ないのが現状である。

明治期以降、大森家は、柿原家と並んで大宮町の絹買継・銘仙買継の中心的役割を担った。明治10年代には銀行代理店を開き、明治中後期には町の商家を先導して秩父銀行の設立を推進、実現し、最大の株主となって資金を供給した。大森家は、絹や銘仙の集荷・販売に必要な金銭融通や為替決済の面でも町の中核をなしたのである。

この大森家の史料のなかに、江戸時代末期の経営状況を示すものとして、文久3年(1863)年から明治3年(1870)にわたる『金銀出入帳』³⁵⁾がある。本節では、そこからうかがえる幕末～明治初期の大宮町の有力絹商人の取引内容を具体的に提示していきたい。

この帳面は、大森家の経営帳簿であり、内容的には絹の買付や糸取引に関する記載が圧倒的な比重をもつ。家賃収入や金銭貸付による利子収入などもあるものの、幕末期の大森家の経営が絹・糸

の取引に依存していた状況が看取できる。

まず、注目したいのは、大森家の経営が複数の部門に分化しつつあったことである。帳簿には、「絹方入用」という項目や「糸方」という名目での金銭出入がみられる。「絹方」とは、絹の集荷と販売を担当する部門を意味し、「糸方」とは、安政6年(1859)以降、秩父領内でとくに盛んに生産された糸を扱う部門である。以下、絹取引と糸取引について順にみていこう。

帳簿には、絹の集荷状況(代金と絹の疋数)が日毎に連綿と記されている。それらをみると、幕末～明治初期においても大森家の絹購入が、依然として旧来の絹市の枠組みのなかで行なわれていたことが明らかとなる。

大宮町の市は、帳簿上「前市」と記される。「前市」での絹買付の日付は、若干の例外を伴いつつも、ほぼ完全に1・6・11・16・21・26の月6日(大宮町の六斎市の市開催日)に固定されていた。市日ごとの絹購入量に目立った偏りはなく、大森家が、すべての市日を利用し満遍なく絹集荷にあたっていたことがわかる。こうした状況は明治初年においても同様の傾向を保って継続していた。絹買付の量的な変化は、月単位に比較すれば、かなりの偏差が確認される(第2表)。7月～9月が一つのピーク時であり、そのあとは12月と3月がとくに大量の集荷期となっている。反対に正月は市を通した集荷がまったくなされず、絹大市が開かれる11月にしても相対的には中規模の集荷にとどまっている。

大森家の絹買付の範囲は、大宮町内でおさまるものではなかった。八幡山(現児玉町)・小鹿野・吉田・寄居・小川・野上(現長瀬町)・飯能・皆野などに赴いて絹集荷を実現し、時には上州伊勢崎にまで及ぶことがあった(第1図)。八幡山で絹を買う日は3・8の日であり、同様に、小鹿野では5・10の日、寄居では4・9の日、小川では1・6の日と、それぞれの地で開催される市に出向いての集荷であった。化政期の時点で、大宮町の絹買仲間の集荷先が八幡山・吉田・寄居方面へと拡大していたことが指摘されているが³⁶⁾、大森家

第2表 幕末期の秩父大宮絹市における大森家の絹集荷の状況

— 文久3年(1863)4月～元治元年(1864)3月 —

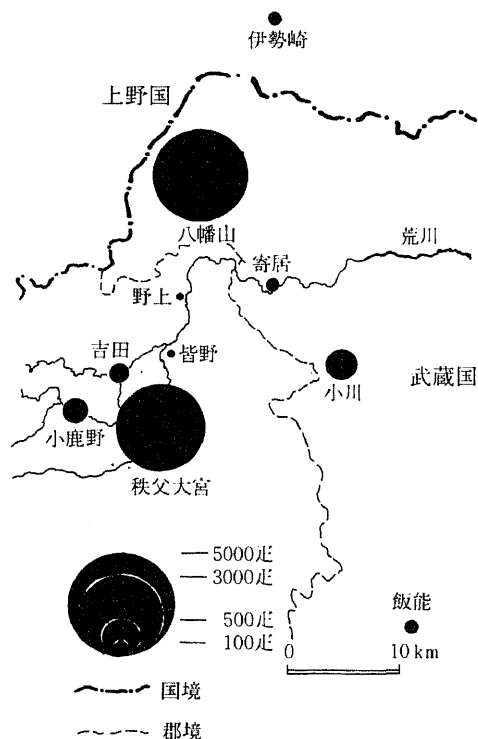
月	絹買量	絹 買 代 金				
	疋	両	分	朱	貫	文
4	219	194	1	2	90	850
5	6	6	0	2	2	200
6	26	41	1	3	10	580
7	481.5	554	2	0	257	240
8	555	680	2	0	296	0
9	325.5	393	2	0	174	700
10	187.5	230	1	2	102	300
11	224	315	1	3	109	350
12	500	728	3	3	260	380
1	0	0	0	0	0	0
2	268.5	493	0	3	128	900
3	574	1142	2	0	272	700
合計	3367	4780	3	2	1705	200

(文久3年～明治3年「金銀出入帳」(大森家文書)より作成)

注) 文久3年4月から帳簿の記載が始まっているので、翌年3月までの1年間にわたる絹集荷について集計した。

の場合、幕末期にはその範囲をさらに広げていた。この時期の大森家にとって、八幡山の絹市は、地元大宮町以上に重要な絹集荷地であった。一回一回の買付量が巨大であり、注ぎ込まれた資金も巨額であった。八幡山では、春と夏に集荷が集中している。

次に、絹の販売先が問題となる。各絹市での大量買付に比べて、絹の「市売」は希少であった。「市売」は、あったとしても数疋から十数疋程度の微量なものにとどまった。各地の絹市は大森家にとってあくまでも集荷の場であり、販売の場とはならなかった。それ以外に、「絹代」として入金額が明記される場合があるが、それらの販売相手は「柿原」「井上正兵衛」など大宮町ないしその周辺の商家が多かった。ただし、その量は多くても数十両規模であり、秩父地域に卸す販売方法は大森家の主流ではなかったといえる。



第1図 文久3年(1863)4月～元治元年(1864)3月における大森家の絹集荷

幕末～明治初期、大森家の絹販売の目は、江戸に向いていた。もともと大森家は、自己資金による絹の集荷は少なく、江戸呉服問屋の前貸金を受けて絹の「代買」を行っていた。しかし、この段階では、帳簿のなかに、そうした呉服問屋との金銭の流れをほとんど見つけ出すことができない。「本郷伊豆蔵」からの入金がたびたびあるので、かつて大森家が伊豆蔵の買継商となっていたことが推測されるが、取引金額は一回あたり数十両規模であり、他と比べてきわめて小さいものであった。つまり、江戸の有力呉服問屋からの巨額の前貸金供給は減少し、取引先としても重要ではなくなっていたのである。これは、大森家が江戸呉服問屋資本の影響下から脱し、自己資金を蓄積して、独自の才覚による経営を行なうようになってきたことの表われである。大森家の絹取引は、受身的な代買活動から主体的な販売活動へと確実に変化

していた。

むしろ注目しておきたいのは、帳簿に出てくる「江戸方」なる記載である。大森家と「江戸方」と間の資金移動は通常でも数百両単位で、時には千両以上にのぼることがあった。このうち、入金の主たる部分は江戸での絹販売の代金であつたろう(他に、経営資金の「江戸方」よりの持ち込みの可能性もある)。その「持出し」や「持参」を、「内 和兵衛」「内 太兵衛」「内 仁兵衛」など「内」という肩書きをもつ者たちが行なっていた。これらの人物は大森家に雇われた手代・商家奉公人であり、江戸と秩父とを往復して絹取引の実際面を切り盛りする役割を果たしたと思われる。とすれば、大森家が江戸に販売の拠点を確保していたことは間違いなく、それが帳簿上「江戸方」という表現で登場してきたのだということがわかる。大森家の主要な取引相手に「ち・ふ井半」と「江戸井半」とがあるが、この場合も井上某³⁷⁾という秩父の商家が、地元の店と別に江戸進出を果たしたことを示している。大森家の手代は「江戸取集金」を大宮町の同家にもたらししており、彼らが「江戸方」に勤務し、江戸市中に築いた複数の販路を廻って絹販売と集金を担当していた様子がうかがえる。さらに、彼らは江戸ー秩父間の商取引以外にも、藤岡方面へ大金を持って出張するなど、広範な商取引に力量を発揮した。

大森家が江戸と秩父との間で動かす資金は規模が大きく、京屋・大坂屋など有力な飛脚問屋に輸送を委託する方法以外に、為替による決済が頻繁に利用された。大森家の為替を主に担当したのは、大宮町上町で経済成長を遂げた商家升屋(矢尾)利兵衛とその分家たちであった³⁸⁾。升屋は、宝暦期より明治初期にかけて、親族分家・支店を合計19家も輩出している。大森家は升屋同族のなかでも、大宮上町の総本家升屋利兵衛と飯能の升屋・小川の升屋を為替契約の機関として多用した。この事実によって、大森家の資金輸送ルートと重なって、同家の絹輸送ルートが、大宮郷から正丸峠を越えて飯能へ出る交通路、および小川から川越へ抜ける交通路にあったことも理解できよう。

秩父大宮の有力絹商人が自己資金を駆使した独自の絹取引を展開するようになって、資金輸送の面でも升屋などの地元の商人の活躍が目覚ましくなった。飯能や小川への升屋の分家・支店の進出は、大宮町絹商人の絹流通と密接に連動する経済現象として理解すべきである。

つづいて「糸方」に目を転じよう。文久3年の時点で、大森家は大規模に生糸商売を手がけていた。生糸の仕入方法は、大森家が直接仕入れる場合と大宮町在住の他の糸商人を介して集荷する場合とがあった。「浦庄」(江戸時代後期の太宮町の有力な絹・糸商人である浦嶋庄左衛門)に対しては、頻繁に糸代金を支払っている。一方、販売方法は、「市売糸代」として数百両単位の入金があり、文久2年(1862)以降、絹市に付属する形で開催された太宮町の糸市が重要な売場となったことがわかる。その他、「浜出糸代」があり、輸出用生糸の形で横浜へ輸送・売却する動きもみられた。また、太宮町の浅見伊八(絹買仲間の浅見宗兵衛から分家し、絹・糸商人として幕末～明治初期に急成長した太宮中町の商人)にはたびたび生糸を売っており、文久3年8月25日には浅見から糸代金400両を得ている。浦嶋家の場合と反対に、大森家自身が太宮町の糸商人に糸を卸すことも行なったのである。こうした糸の仕入・販売は「糸方」が管轄した。「糸方」の出費として、糸掛縄延代・油紙代・荷車代などの費目が挙げられている。元治元年(1864)1月10日には、「糸方若者へ褒美」として10両が支出されており、大森家の「糸方」に雇用されて勤務する従業員が存在したことがわかる。大森家の経営部所として「糸方」が独立しつつあったのである。

これら糸の売買は一回あたりの取引額が数百両から千両にのぼり、とくに仕入の面で巨額の資金を必要とした。大森家は、自己の資金を「乗合」形式で他家に供出し、その資金運用に参画した。慶応元年(1865)閏5月、大森家は、糸の販売相手であった浅見伊八に対して500両の「糸乗合出金」を供出している。それ以前の文久3年(1853)6月には、浦嶋庄左衛門も三蔵という人物と「乗合」

経営を始め、江戸の伊勢屋平助への「糸買送り」を実現している³⁹⁾。幕末期の秩父太宮では、有力な商人同士が共同出資によって資金を集中し、糸取引において自律的な共同経営に乗り出す動きが起こっていた。

大森家は繭も商品として扱った。「在方繭代」として数両から十数両の入金を得ている場合が多く、大森家が、集めた繭を在村部に売り出す商売形態をとっていたことがわかる。ここから、在村部における繭の購入者、すなわち製糸業を開始した地主たちの姿が垣間みえる。

また、帳簿には、「せり方」「糴方」の名目での入金と出金がみられる。これは絹をはじめ大森家の扱う商品の集荷のための資金運用であったと考えられる。大森家は、ある程度の糴人を雇用し、絹の集荷にあたっては、それら糴人に購入資金をもたせ、太宮・八幡山・小鹿野など各市場に派遣していたのであろう。

ところで、幕末期には、大森家と個別的・専属的に取引関係を有し、同家の扱う大量の絹染色を一手に引き受ける商人が存在した。たとえば大森家は、「あは屋」という染色屋に「染代内渡し」＝前渡金を与え、自家の絹を染めさせる契約を結んでいる。元治元年9月24日には、「あは清」(あは屋清六)に対して400両もの資金が与えられている。染色に出される大森家の絹がいかに大量であったかを物語っている。また、元治元年(1864)1月19日には、大森家が平野屋仁三郎から「染代預り」として金85両3分を受け取っている。大森家は、染色を希望する他の商家と自家の契約する染色屋との間に立って、染色の斡旋・仲介業務も行なっていた。明治初期、升屋(矢尾家)の「染出し」絹の取扱量が、繊維商品類全体の約7割を占めていた⁴⁰⁾ことから知られる通り、幕末～明治初期の太宮町の有力絹商人は、生絹の形での出荷ばかりでなく、柄物・染絹の販売をも積極的に推し進めたのである。

大森家の商業活動に関して最後に指摘しておきたいのは、在村部の生産現場との直接的関係が希薄だったことである。流通面では巨額の資金運用

がなされたが、生産面に関わる収入・支出は皆無
といってよいほどみられない。各村の地主・百姓
との間に入金・出金の関係がないのである。「せ
り方」の存在に在村部での絹購入の余地を残すが、
資金・原料を貸与し、製品を受け取るといった前
貸仕込問屋形式はとっていない。大森家は、日常
的に絹市を利用して集荷を実現し、絹市の円滑な
取引を常に志向していた。それは、同家があくま
でも流通面での資金運用に経営の重心を置いてい
たためである。そのことは、逆に、在村部に生産
農家を前貸仕込方式に労働力編成する者があった
ことを予察させる。それこそ、村々の「機元」だっ
たのではないだろうか。

2)「賃引」糸繰の開始

では、生産現場である村々では、幕末期にいか
なる生産関係がみられたのであろうか。その点を
糸についてみておきたい。

『松本家御用日記』⁴¹⁾の文久3年(1863)月4
月12日の条に以下のような記述がある。

一、大野原村堀口本蔵が横瀬村源右衛門組宮太郎太
十郎江昨年中賃引二遣候糸繰質入いたし差滞候旨、
右繰買元直段兩人二而四拾三兩貳朱金子歟繰二而も
兩様之内相済候様願書差出取次上候処、来ル十五日
訴答御呼出シ被仰付候

大野原村の堀口本蔵が繭(繭)を買い取って、そ
れを「賃引」させようと横瀬村の二人の百姓に渡
しておいたところ、二人の百姓が無断で繭を質入
してしまい、堀口が弁償を迫った事件である。こ
の堀口本蔵は、文久期、大宮町への糸会所設立要
請運動を主導し、「糸繭買仲間」「糸買願人仲間」
の中心となる人物であった⁴²⁾。忍藩から調達金
の上納を求められていることが、当時の堀口の資金
力の大きさを物語る。

この事実によって、幕末期の秩父郡の農村で、
原料の繭(繭)から糸繰りをする工程が百姓の労働
力を使った「賃引」の形態で行なわれていたこと
が明らかとなる。そうした生産の仕組みは村の枠

をこえて広がっており、大きな資金を有する在村
の者が原料を買得・集荷し、周辺村々の百姓を「賃
引」労働に編成して前貸仕込問屋的な生産組織を
構成していたのであった。

さらに、幕末期の大宮郷周辺における糸生産の
実態を下影森村の事例からみてみよう。下影森村
の名主戸塚家に現存する、文久2年(1862)の『糸
繰諸入用扣帳』⁴³⁾を整理したのが第3・4表で
ある。

下影森村の地主である戸塚家が、坐繰や揚杵と
いった製糸の道具を複数買い集めている状況がよく
わかる(第3表)。そして「入金覚」の項には、
6月22日の「入金貳兩貳分也 浅見伊八買 百五
十目 廿くれ」をはじめ、生糸による収入が列記
されている。生糸の売上収入は、6月末から9月
中旬までの間に合計75両1朱(生糸5貫目以上)に
達している。

戸塚家の製糸労働力は、周辺村々の百姓家の女
性労働力に依存していた(第4表)。この帳面には、
仕事の開始日と終了日が記され、働いた日数分だ
け丸印を書くという方式で女性の労働日数が表現
されている。給金は、1月あたり金1両～1両2
分が支給されていた。労働形態は、「不参」「昼
相始申候」などの記事が示す通り、戸塚家が坐繰
を個々の百姓家に貸し出す形ではなく、百姓の子
女を居宅に集めて働かせるものであった。おそらく、
戸塚家にはこれらの女性労働力を収容する施設(作業場)
が用意されていたのであろう。そして、そこに置
かれた坐繰を使って、女性労働力の協業による生産
組織が形づくられていたことが理解できるのである。

こうして、大宮郷に隣接する村々では、製糸の
方法について、「賃引」さらには作業場での協業
形態の生産の仕組みが生まれていた。在村での地
主層の資本蓄積とその運用方法の一つの表れとし
て製糸業の展開を指摘することが可能であろう。
そして、そうした地主層の資金運用の牽引力の一
つとして、大森家のような大宮町の絹糸商人の需
要・購買力が考えられるのである。

第3表 文久2年(1862)下影森村戸塚家にみる製糸関係の出金・入金

a 製糸関係出金			
月	日	金 額	出 金 理 由
6	11	3分3朱	名倉森新ニ而坐繰2ツ
6	11	1両 2朱	泉田伴蔵内ニ而坐繰3ツ
6	11	1分	200文 泉田伴蔵宅ニ而揚わく代
6	11	3分	200文 信濃石ニ而和吉方ニ而坐繰2ツ
6	17		772文 わく3ツ代
6	17		800文 わく4ツ代
6	17	1貫100文	わく5ツ代
6	20	2貫100文	わく10代

b 糸販売による入金				
月	日	金 額	糸重量	販 売 先
6	22	2両2分	糸 150目	浅見伊八買
7	1	5両1分1朱	糸 350目	野土横田
7	6	6両 1朱	糸 380目	金子屋
7	11	9両 2朱	糸 565目	名倉森伊兵衛方
7	21	6両1分	糸 420目	名倉森伊兵衛方
閏8	1	9両1分2朱	糸 630目	
閏8	6	5両2分2朱	糸 390目	
閏8	16	10両3分1朱	糸 740目	
9	6	11両2分		
9	11	8両2分		
合 計		75両 1朱	糸3625目 + α	

(文久2年「糸繰諸人用扣帳」(下影森村戸塚家文書)より作成)
 注) 9月6日、11日分の糸重量が記入されていないため、実際の合計糸重量は5貫以上にのぼると推測できる。

第4表 文久2年(1862)下影森村戸塚家にみる製糸労働

人 名	労働日数	労働の期間	7月15日の支給金額※
まつ	26日	6月18日～7月13日	2両
	4日	7月19日～	
しうん	26日	6月18日～	2分
せう	24日	6月18日～	3分2朱
		(6月22日～6月27日不参)	
るい	23日	6月18日～	1分3朱200文
		(7月4日～7月5日不参)	
もと	24日	6月18日～	3分600文
くに	23日	6月22日～	1分2朱
かい	7日	6月28日～	2朱500文
ゆき	15日	6月27日～7月12日	2朱264文
長吉娘ひて	12日	8月4日～8月15日	
もん娘きく	12日半		
田村郷弥太郎娘2人	2日	8月29日～	
はる	18日半	8月29日～9月19日	
		(9月15日不参、9月18日半日)	
はる姉	18日半	8月29日～9月19日	
		(9月15日不参、9月18日半日)	

(文久2年「糸繰諸人用扣帳」(下影森村戸塚家文書)より作成)
 注) ※は7月15日に戸塚家から金銭を与えられていることを示す。労働日数と金額とに直接的な比例関係はみられないので、個々の女性の給金の支払方法によって差異が生じたものと思われる。

Ⅳ おわりに

18世紀後半から19世紀初頭にかけて、秩父郡内では、江戸問屋商人の絹需要によって絹生産の高揚が継続し、そのことが契機となって、桑・繭・糸のそれぞれのレベルで商品化が進んでいった。秩父郡内の百姓の間に桑・繭・糸の需給関係が生じ、桑を購入しての養蚕、繭を購入しての糸繰り、糸を購入しての絹織というように、生産工程の分化の兆しがみえ始めてきた。そして、商品の集荷・販売に関わって、原料生産から製品加工までの分化した過程をつなぐ役割を果たしたのが、化政期前後に多数現れた「農間」商人たちであった。彼ら一人一人の経済活動は大きくはなくとも、絹をはじめ桑・繭などを商品として扱う者が増え、市と村、村と村との流通網をきめ細かに成立させていたことは注目に値する。また、直接江戸での絹商売に乗り出す者、絹の染色に携わる者、絹輸送から収入を得る者など、秩父絹の生産と流通の活発化は、多様な労働力需要と現金稼ぎの機会拡大を引き起こした。村には「機元」が生まれ、生産農家の労働力編成も進んだ。そもそも、江戸時代の秩父郡の百姓は、大小麦・大小豆・粟・稗・煙草・吊し柿・楮・薪炭などの諸種の生産物を組み合わせ、林業も含み込んだ多角的な経営構造を有していた。そうした多角的経営の一環として、絹の生産・流通の諸場面に食い込む特徴が顕著にみられたのである。

従来、未分離な一貫生産形態という秩父絹の特徴づけは、各種の専門仲間が展開した上州桐生の織物地帯との対比において、分業の発達段階上の格差として強調されることが多かった⁴⁴⁾。しかし、秩父絹についても、そうした一貫生産と併存する形で、実態面では、村々の百姓による生産の分化が徐々に進んでいたのである。

また、生産地の未分業化という論調と密接に関わって、絹買商人の性格については、江戸問屋資本への従属といった視点での研究がなされていた⁴⁵⁾。ただし、大森家の例をみると、幕末期には完全にその影響下を離れ、自己資本の運用によ

る絹・糸取引を拡大させていた。大森家では経営部門の分化がみられたが、それは、大宮郷周辺の百姓が絹・繭・糸の商品化を進展させていたことに対応したものであった。江戸に独自の販売拠点を確保した大森家は、手代・奉公人を駆使して、絹の集荷範囲を郡域をこえて拡大していった。ただし、それはあくまでも絹市を通しての集荷であった。そこに象徴されるように、大森家は巨大な資金を蓄積しつつも、それを基本的には流通資金としてのみ運用した。その背後には、幕末期の糸生産にみられたような、農村部の地主層による前貸仕込問屋的な生産形態が成立していたのである。村の生産者は村の地主層の資金によって生産を活発化させ、大宮町の絹商人とは絹市を媒介として流通面で関わった。絹市という売買の場が明治初期においても機能した所以である。

安政6年の横浜開港以降、秩父郡内の農村部では即座に「賃引」糸繰が始まった。それが、生糸価格の暴騰と販売の有利性に起因したことはいうまでもない。ただし、ここでは、大森家のような絹買商人が自己資金を蓄積し、村々の生糸を買い上げ流通ルートにのせるだけの対応力を醸成していたことと、村方での労働力雇用の関係がスムーズに展開する素地ができあがっていたこととくに注目しておきたい。いまここで、「機元」と「賃引」主との連関を断定することはできないが、製糸における「賃引」形式の基礎として、絹における賃機形式の生産組織が秩父郡内に広まっていたことを予想するのは困難ではあるまい。また、幕末期から明治初期にかけての絹織物生産の壊滅と生糸生産への傾斜という劇的な変化が従来指摘されてきたが、それについても、絹織物の比重は小さくなったものの、その伝統は連綿と引き継がれ、それが明治後期の秩父銘仙の歴史的・技術的前提となっていたと考えるべきではないだろうか。

本報告では、たんに事例を紹介するにとどまり、その社会背景に関してはきわめて不十分な内容になってしまった。とくに、生産現場の実態と変化については、消極的理由から生産工程の分化を予想したにすぎない。今後は生産の村を基軸に、そ

の生産組織と集荷・販売のあり方を大宮町をはじめ周辺社会の経済的・社会的変化との対応関係のなかで考察していきたい。

付 記

本稿の作成にあたって、秩父市熊木町の柿原謙・氏には貴重なご助言・ご教示をいただきました。氏の御著書『秩父地域絹織物史料集』と『秩父地方郷土史雑考』が上梓されたことにより、我々の調査は大きな指針を得ることができました。また、資料収集の際には、秩父市立図書館長の千島壽氏に、図書館所蔵の資料閲覧や調査の便宜をはかっていただきました。秩父市立図書館の皆様にも、あたたかいご支援をいただきました。以上、記してお礼申し上げます。

注および参考文献

- 1) 埼玉県秩父繊維工業試験場他編(1960):『秩父織物変遷史』, 柿原謙一(1993):『秩父地方郷土史雑考』, 秩父郷土研究会。以下、秩父郡ないし大宮郷の絹の生産・流通の概説については、とくに注記しない限り、上記の2著書に依る。
- 2) 柿原謙一編(1995):『秩父地域絹織物史料集』, 埼玉新聞社, 31~32。以下、本書からの史料引用は『史料』と略記し、ページ数のみ記す。
- 3) 林玲子(1963):関東生絹の流通構造, 土地制度史学, 21, 55~72。
- 4) 『史料』, 69~70。
- 5) 『史料』, 93ページ。
- 6) 『史料』, 93~94。
- 7) 『史料』, 80ページ。
- 8) 『史料』, 134ページ。
- 9) 『史料』, 123~124。
- 10) 『史料』, 147~148。
- 11) 『史料』, 140~141。
- 12) 岡村治・川崎俊郎(1991):西秩父における町形成と商業の展開—近世・近代の小鹿野町を事例として—, 歴史地理学調査報告, 5, 1~29。
- 13) 『史料』, 64~65。
- 14) 『史料』, 89~90。
- 15) 川崎俊郎・山澤学・河野敬一(1994):秩父大宮の都市形成と商業の変遷, 歴史地理学調査報告, 6, 103~121。
- 16) 一例を挙げれば、天保5年(1834)の別所村の農間渡世として「蚕種商」1名と「屑繭一式」・「屑繭」商人各1名ずつの名前が挙げられている(『松本家御

- 用日記』秩父市立図書館所蔵)。
- 17) 『史料』, 72～73。
- 18) 秩父市誌編纂委員会・秩父市立図書館・秩父郷土研究会(1960):『忍藩秩父領割役松本家御用日記類抄 第二分冊』, 秩父市誌編纂委員会, 56ページ。
- 19) 『史料』, 68ページ。
- 20) 『史料』, 143ページ。前掲18)『松本家御用日記類抄 第四分冊』, 62ページ。
- 21) 前掲3)によると, いわゆる秩父絹は, 裏地に適した平織の生絹が中心の半成品であり, 練染張などの仕上加工は, 複雑な各種の職人を擁する京都においてなされ, 呉服問屋は, 半成品である生絹を仕入れ, それに仕上加工を施すところに利潤獲得の道を求めていたとされている。
- 22) 『史料』, 44ページ。
- 23) 『史料』, 41～42, 58～59。
- 24) 『史料』, 120ページ。
- 25) 『史料』, 176ページ。
- 26) 『史料』, 79ページ。
- 27) 『史料』, 135～137。
- 28) 『史料』, 157～158。
- 29) 『史料』, 161～162。
- 30) 『史料』, 167ページ。
- 31) 『史料』, 32～33。
- 32) 『史料』, 180ページ。
- 33) 松石泰彦(1993):『幕末期西上州における絹商人と絹流通』, 地方史研究, 245, 71～87。
- 34) 『史料』, 39ページ, 60～61, 77～79。
- 35) この帳簿には, 髪結の支払いや煙草代金, 下人(この場合, 店の奉公人というより家人の世話を行なう者のようである)の給金・小遣, 野坂寺との貸借, 無尽掛金の貸借など日常生活や家計に関する出納状況も多く含まれている。商家経営と家計とが同一帳簿のなかに混在し, 両者は未分離の状態にあった。また出金・入金の別とその対象となる人物・商家名は記されているものの, 出・入の事由については明確な記載に乏しい。そのため, それが商取引(売買関係)によるものか, 貸借関係の表れか判別しきれない部分が多い。
- 36) 前掲1), 『秩父織物変遷史』, 76～77。
- 37) 明治3年(1870)の「武蔵国秩父郡大宮郷戸籍帳」よれば, 穀商・酒升売商人として井上半右衛門が記載されている。
- 38) 前掲15)。
- 39) 『史料』, 192～195。
- 40) 前掲15)によれば, 升屋はもともと近江国蒲生郡の出身で, 寛延2年(1749)に町に來住した当初から酒造業を開始した。その後, 質屋・万商といった商業活動に経営の足場を広げ, 明治初期には, 大森家同様, 絹・太物類の買継商売も営んだ。
- 41) 秩父市立図書館所蔵。
- 42) 『史料』, 187～188。
- 43) 秩父市立図書館所蔵。
- 44) 前掲3)。
- 45) 前掲3)。